

紙芝居文化の動向Ⅱ

人生紙芝居の成り立ちとその実践

塚原 成幸

Trends in Kamishibai Culture Ⅱ

The origins and practice of the Life History Kamishibai

Shigeyuki TSUKAHARA

要旨

児童文化財として認識されている紙芝居は近年、介護現場での活用が多く報告されている。中でも、NPO法人みんなの家（静岡県賀茂郡西伊豆町／代表：奥田俊夫）で行われている活動は、人生紙芝居と命名され、既存の紙芝居活動を凌駕する実践となっている。人生紙芝居とはどのような活動なのか、人生紙芝居を考案した奥田真美の語りから、人生紙芝居の成り立ちや制作上の留意点、介護現場における有用性を考察した。

キーワード：紙芝居・児童文化・演劇表現・介護とケア・ライフストーリー

1. はじめに

上地（1997）は、「紙芝居とは、簡略にいうなら、ストーリーに従って描かれた何枚かの画面を、次々と引きぬきながら、ストーリー内容を効果的に語っていくメディアです。」と述べている。つまり、紙芝居は、画面に描かれた絵と物語を結びつけ、物語（内容）を効果的に伝達しようとする媒体の様式である。

本稿は介護現場で取り入れられている人生紙芝居の実践について、NPO法人みんなの家（以後、みんなの家）ケア主任・奥田真美（おくだ まみ、以下奥田）の聴き取り調査を基に、人生紙芝居と命名された紙芝居活動の成り立ちや特徴、介護現場における有用性について検討を行うことを目的としている。

みんなの家における紙芝居活動は、印刷紙芝居の実演から始まった。その活動はやがて、利用者に対する聴き取りを基に制作される手作り紙芝居へと移行し、現在では、みんなの家が提供する介護サービスの中心的なプログラムとなっている。高齢者ケアにおいて紙芝居を活用するとはどのようなことなのか、本稿でその実践を論考した。

2. 高齢者ケアと紙芝居

一般的に紙芝居は保育現場における視聴覚教材の一種と考えられる場合が多い。しかし、川崎（1972）は、「紙芝居は、視覚にうったえることができるために、ふしぎな魅力をもっている。わたしは、“紙芝居は三歳から八十歳までの芸術”だと考えている。」と述べ、さらに、「（前略）その実演をやりだすと、三つの子どもから、おじいちゃんおばあさん、ヨメさん、オヤジさんにいたるまで、真剣になって、一生けんめいに見ている。」としている。紙芝居文化をけん引した先駆者は、体験的にその魅力、

対象の広範さを実感していた。しかし、紙芝居が介護専門職の間で注目されるようになったのは、2004年のことである。当時、東京都練馬区で介護職に従事していた遠山昭雄¹（以下、遠山）は、介護雑誌「ブリコラージュ」（編集七七舎/2004年6月号）に初めての紙芝居特集「紙芝居はウケるぞ！」を寄稿した。〈写真1を参照〉

遠山（2006）は、「（前略）これが予想外の『反響』を呼び、在庫が無くなったあとにも問い合わせが続出するほどの盛況となったのです。」と述べている。ブリコラージュで紹介された高齢者ケアに紙芝居を活かそうとする流れは、その後も加速していく。高齢者ケアと紙芝居。両者は一見すると不一致な印象を受ける。しかし、紙芝居の生命線である物語を語る、ということについて Howard Brody（2001）は、「（前略）物語を語ることは『橋をかける＝関係づける』行為である。最も分かりやすいのは、『語る』ことは『語り手』と『聴き手』をつなぐということである。」と述べている。さらに、野口（2002）は、「語りも物語も『言葉』でできている。臨床の場は『物語』の展開する場でもある。」としている。つまり、介護という臨床の場において、語り手、聴き手、そして物語りが介在することは決して奇異なことではない。



〈写真1〉

「ブリコラージュ」

3. 人生紙芝居を考案した奥田真美

(1) 介護福祉士・奥田真美の経歴

認知症のケアに回想法というアプローチが存在する。小林（2009）は、「自分の生きてきた軌跡を振り返ることを基本とする回想法ですが、そうした『振り返りの価値』には大きな意味があることがわかってきました。『体系的な回想法』を行うということは、結果的にはかなり詳細な『生育歴』の作成につながるそうです。」と述べている。また、遠山（2006）は、「（前略）みんなの家の取り組みは、ケア現場における手作り紙芝居のひとつのモデルを提示しているようにも思えるのです。」と述べている。この点からも自分自身を振り返り、過去の出来事を受容しようとする人生紙芝居の試みは、卓抜したケア実践の一つと考えられる。

みんなの家に紙芝居活動を取り入れたのは、ケア主任・奥田真美である。なぜ奥田は介護の世界に紙芝居を導入しようと考えたのか。人生紙芝居を生んだ奥田自身の語りを手がかりに紙芝居と介護の接点について考察した。（奥田が勤務している、みんなの家で2018年8月22日に聴き取りを行った）〈写真2参照〉

奥田は、1963年（昭和38年）、神奈川県川崎市に生まれた。小学校、中学校と地元の学校に通い、その後、神奈川県立の高校に進学。大学は東京都八王子市に所在する東京薬科大学で学んだ。父親は中学校の教師、母親は奥田が2歳の頃に他界した。その後、父親が再婚したため、実質上、継母に養育された。父親と継母の間には子どもはなかったため、奥田は一人っ子（長女）として成長した。以下、奥田の語りを紹介する。（文中太字、被取材者の語り）



〈写真2〉みんなの家外観（2018）

子どもの頃は、勉強が出来て、受験も無難にこなしてました。帰宅部的な感じで、いつも塾に通っている子でした。一人っ子だったから、きょうだいの葛藤とかもないし、人と関わる仕事は苦手だ

など思って、だから、試験管と話をしていたほうが良いと思って、理系の大学に行きました。

奥田は現在、みんなの家のケア主任として、日々アクティブに高齢者ケアを実践している。現在の姿からは幼少期の面影を想像するのは容易ではない。特に人と関わることに苦手意識を持っていたことは意外なことである。都内の大学で薬学部在籍した奥田は、1986年に東京薬科大学を卒業し、薬剤師となった。その後、ライオン株式会社に就職し、商品開発を担当することになる。しかし、会社組織に馴染みにくかったことや、企業論理優先の社風に疑問をもったことから早々退職する。その後、東京大学医学部附属病院老人科第二研究室技術補佐として助手の仕事に従事するが、その仕事も長くは続けてはいない。

会社勤めで行き詰った部分もあるし、ちょっと精神的にも追い詰められた感じもありましたね。その頃、ST（言語聴覚士）になろうと思って、所沢にある養成所を受験したんだけど、倍率が高くて受からなくて、じゃあ、介護の方を学ぼうかなって思って、YWCAの専門学校に入り直しました。

奥田は、1989年に東京YWCA専門学校社会福祉専門課程社会福祉科シニアコースに入学。在学中のインターンシップを含めて、高齢者と向き合う環境が整った。しかし、当初から介護の仕事に対して天職だとは感じてはいなかった。

週1回の通年実習というのがあるんですが、ものすごく辛くて、実習の日になると、とにかく嫌で憂鬱でしたね。私は何でも先回りして物事を考えてしまうタイプだったんです。なんでも自分で勝手に判断して、「この人はこう思っているからこうするんだって」断定するタイプで、ジュニアコースの学生と一緒に実習に行くんですけど、ジュニアコースの人はすごく素直に馴染んでいくんだけど、私にはそれが出来ず、いろいろ考えちゃって、そういう所がダメだったんだと思います。

実習等で介護の仕事にふれるようになったが、前職の経験も影響し、自分自身の適性をすぐに感じ取ることができなかった。1990年に東京YWCA専門学校を卒業した後、東京都世田谷区にある介護事業所でケアの仕事（高齢者在宅サービス・フレンズケアセンター）に就く。現場のスタッフになってから少しずつ介護に対して前向きな姿勢に変わっていった。

就職してからは、私が担当する利用者じゃないけど、そのことが自分にとってはすごく大きくて、自分が責任をもってお世話する誰々さんというのが、とても大きな動機づけになって、愛情も湧くし、実習の時とは違って頑張れるようになりました。

利用者本位の精神は、後述する紙芝居実践と重なる部分が多い。対象者を明確にすることで、一人一人のニーズに合ったサービス提供が可能となる。この点も現在、奥田らが取り組んでいるみんなの家の基本的な考え方とも合致している。介護の仕事始めて以降、奥田が薬剤師に戻ることはなかった。介護職に就いてから3年間、フレンズケアセンターに勤務し、結婚、出産を機に退職する。退職後は一時的に仕事から離れ、約5年間、3人の子どもの育児をした。やがて離婚を経験した後、当時住んでいた静岡県静岡市内で宅老所の開所を目指して、「宅老所・グループホームを始めたい人の会」を設

立した。2001年のことである。

ちょうどその頃（2001年）、介護保険制度が始まったばかりの頃で、自分でこういう施設を開設できる状況になってきたので、自分でやってみようと思いました。でも、生活していかなきゃいけないし、子どもも育てていかないといけないから、家の一角でお年寄りを預かるようにして、2階に自分たちが住みたいな感じでやれるかなと思ったりして、それで準備をしていたんです。

2002年、奥田はみんなの家を運営する（奥田）俊夫と再婚した。奥田と子ども3人は、それを機に西伊豆町に移住することになった。同時にみんなの家で再び介護職に従事することになる。しかし、仕事復帰直後から人生紙芝居の実践が始まった訳ではない。

初めは、いろんな意味で田舎生活に馴染むのが大変で、いろいろ辛かったことも多々ありました。ケアにもはまりましたが、調理にも入ったりしていました。最初の頃は、みんなでちぎり絵をしたりしていましたね。お誕生会も月ごとにまとめてやっていました。

やがて奥田は、パーキンソン病²を患っている利用者の介護を通して、事業所としてのケアのあり方について深く模索するようになっていった。

利用者の中にパーキンソン病の方がいました。最期は誤嚥性の肺炎で亡くなったんですけど、そういう方に対して、スタッフが「かわいそう」と言って泣いてるのを見て、ちょっと何かが違うなって思ったんです。けっきょく、私たちが食事の援助とか、いろいろなサポートについて、何も知らなかったし、知識がないというか、ここも大きな社会福祉法人の一ブランチじゃないし、いろいろな勉強ができてなくて、本当に知識がなくて、みんな親切で介護職員と利用者の距離は近くていいんだけど、とにかく知識が不足していて、あまりに貧弱なケアをしていたんですね。それで、その方が亡くなられた時も、私はなんか泣けなくて、私はもっとしっかりケアできるようになりたいと思って、地域介護力アップ講座っていうのを始めるようになったんです。

「このままの介護ではいけない」。今以上に利用者のことを理解し、専門家として成長していく必要がある。そんな思いで奥田らは地域介護力アップ講座を企画するようになった。さらに、この講座を行う中で、2005年6月に介護紙芝居研究家の遠山と出会った。

地域介護力アップ講座のコンセプトはサンダル履きで行ける研修会です。他の法人の介護職員も勉強に来ていいし、家族も来ていいし、私たち職員も勉強しました。例えば、補聴器のこととか、疥癬のこととか、勉強していく中で8回目の地域介護力アップ講座の時、遠山さんをお願いして「紙芝居を老人ケアに活かそう！」というテーマで勉強会をしました。

遠山によって紙芝居の魅力は奥田に伝わった。奥田は、遠山の紙芝居講座に刺激され、紙芝居の実演をみんなの家ですることになった。

(2)奥田真美と紙芝居

精力的に紙芝居活動を行っている奥田だが、介護職に従事する以前は紙芝居との直接的な接点は存在しない。奥田の生年が1963年であることを考慮すれば、幼少期に街頭紙芝居を観ていなくても無理はない。また、紙芝居は一般的な書店では流通・販売していないため（一部を除く）、保育施設に勤務しているか、図書館等で読書活動やおはなし会などを担当しなければ、接点がなかったとしても不思議はない。

紙芝居をみせてもらったという記憶は全然ありません。図書館で探すなんてことにも興味がなかったし、あらためて紙芝居を観たのは、遠山さんにみせてもらったのが初めてくらいです。その時は、楽しかったですよ。遠山さんの講演を聞いた時は、すごく面白かった。

紙芝居を介護現場に活用できることを知った奥田は、さっそく宅老所でも実践してみようと考え、行動を開始する。しかし、みんなの家の活動に取り入れようと考えていた矢先、思わぬ事態に遭遇する。

研修の時は、面白くって大笑いして、「へっこきよめ」³とか、おなら三部作をやってくれたんですけど、こりゃあ、いいやって思って、すぐに借りてきてここでもやりました。でも、みんなけっこう「ふうーん」みたいな感じで、引いて観てて、「おやっ」と思いました。

この反応があったからこそ、人生紙芝居が考案されたといっても過言ではない。遠山の実演に刺激を受けて紙芝居を演じた時、利用者に円滑に受け入れられていたら、みんなの家のスタッフが状況に合わせて既製の紙芝居を上演していたであろう。しかし、想定した反応を得ることが出来なかったことにより、既存の方法にとらわれない人生紙芝居が開発されたのである。

この宅老所で紙芝居を始めた頃、そのままでは利用者に親しみを持ってもらえないから、登場人物の名前をここの利用者名前に変更したり、ここの方言に変えたりしたんですけど、思ったより反応が少なかったんです。普通の雑談では、皆さんよく笑っているのに不思議だと思いました。

利用者が受け入れやすいように、登場人物の名前を変更し、地域の言葉を使うなど工夫したものの、思っていたような反応を得ることはできなかつた。なぜ、自分は面白いと感じた紙芝居が利用者には伝わらないのか、どの点が利用者に支持されにくいのか。奥田は検討を重ねた結果、利用者のライフヒストリーをそのまま紙芝居化することを思いつく。遠山の研修後、2か月が経過した頃、利用者本人の生活史を基にオリジナルの紙芝居を制作する、人生紙芝居が誕生した。

遠山さんの話を聞いてから、最初の紙芝居を作ろうと思うまでは2か月も経っていなかったように思います。あっという間に一つ目はできました。『シロのぼうけん』という紙芝居です。これは、遠山さんの講演を聞く前から、宅老所を利用していた「しろろ〇〇〇〇」さんというお爺さんの人生を紙芝居で表現しています。この方はとても礼儀正しい方でした。しかし、物忘れとかの影響で孫とひ孫がちよっと爺ちゃんをからかうような感じになってきちゃったんです。人間的にはこんなに素晴らしい人なんだから、お爺ちゃんはこんなにすごい人なんだってわかってほしいと思ったんです。

こうして独創的な人生紙芝居の制作がスタートした。ここで人生紙芝居の特徴を確認しておきたい。それは、人生紙芝居が作品づくり主導で展開していないということである。通常、紙芝居が制作される場合、紙芝居の販売を行う出版社も地域の教育・文化活動などで手作り紙芝居が制作される場合も、上演そのものを目的として制作される場合が多い。勿論、原作者として伝えたい主題や伝承したい言い伝えなどは存在するが、奥田が制作を試みた人生紙芝居は、目的そのものが一個人の生活史をまとめ、その人物を紹介することにある。特定の人物に集中してお話を構成することは物語づくりの基本であるが、奥田が考案した紙芝居の特徴は、日ごろから関わりのある身近な人々（利用者）の生き方や人生に光を当て、その人の生き様を丸ごと受容しようとするケアの一形態として構想されている点にある。〈写真3参照〉



4. 人生紙芝居の特性

〈写真3〉人生紙芝居を演じる奥田(2018)

人生紙芝居は、利用者の生活史を紙芝居で表現するコミュニケーションツールの1つである。しかし、みんなの家で紙芝居づくりが開始された直後は、利用者の生活史をありのままに表現する形式ではなかった。むしろ、ファンタジー的な要素が含まれる作風であった。現在は医療やソーシャルワーク実践に活用されるナラティブ・アプローチ的な視点も包含され、利用者が語る「物語 (narrative)」を通して、ケアスタッフと利用者、利用者同士の相互理解を目指している要素が強い。手探り状態で始まった紙芝居づくりであるが、『シロのぼうけん』を制作した後、利用者本人を主人公にする人生紙芝居は次々に創作されていった。

紙芝居を家族にプレゼントした時に身内の方がすごく喜んでくれて、「我が家の家宝にします」と言ってくれました。それから、「お爺さんのお葬式の時にはそれをみんなの前でやります」って、「みんなでお爺さんを送り出したい」って言ってくれたことが、私にとっては想像を超えるリアクションでした。家族にとっては家宝にするくらい大切なものなんだということが自分で作っておきながら、大発見でした。

人生紙芝居実践の象徴的な出来事の一つである。四作目には初めて印刷、一般にも流通することになった『しょいくらべ』⁴が2009年4月に出版された。〈写真4参照〉



〈写真4〉紙芝居『しょいくらべ』

利用者の体験談から紙芝居制作を行うことに好感触を得た奥田は、その後も利用者や家族の願い、思いを的確に吸収しながら紙芝居を制作していった。転機となるのは、10作品を超えた頃に手掛けた『安良里情話』という作品である。

安良里情話あたりから、その人の人生をしっかりと聴き取るようになりました。この頃から、「別に周りにウケなくてもいいんだと」思うようになってきました。

当初は余暇活動の延長線上にあった紙芝居制作が、徐々にみんなの家が行うケアの中心的なプログラムへと変化していったことが分かる。奥田が語っているように『安良里情話』以降の紙芝居は作風に

も変化がみられ、人生紙芝居の体裁が確立されていった。

あの作品（『安良里情話』）は私にとってターニングポイントになる作品です。家族で介護するのは限界じゃないかと思えるような家庭状況だったんですが、ちょうど誕生日も近いということで、聴き取りに行きました。そうしたら、ご主人が奥さん（利用者）とのなれそめをすごく語ってくれて、3時間くらい語った後に、「嫁のことを愛していたって書いてくれって」話されて、そのこと自体がご主人のデトックスになるような感じでした。この言葉を語るために3時間話してくれたんだと思いました。

『安良里情話』以降、利用者の経験から着想を得て紙芝居を創作する形態から、利用者本人やその家族の記憶、経験、感情に寄り添おうとするナラティブケアの様式へと人生紙芝居は変化を遂げていく。

生きていく上で語るということはすごく大切です。でも、語るためにはやっぱり聴く人がいないとダメなんです。とにかく私はケアの本質は、聴くことだと思っています。

自らの生の記憶を語ること、それこそがケアの根幹であると奥田は考えている。その意味において、語られた生の記憶が紙芝居として再生され、さらに自分と他者をつなぐコミュニケーションツールに発展した点が人生紙芝居の最大の特徴と考えられる。全体の構成や観客の反応を重視すれば、フィクション作品の方が支持を集めそうであるが、人生紙芝居は真実性を最も重要視していることが分かる。

奥田は日頃から、人生紙芝居の本質を、「人生かみしばいで、人生かみしめ合い」と表現している。人生紙芝居は自己理解と他者理解を円滑にするためのケア実践である。

みんなお互いがどんな人生を歩んできたかには興味はあるんです。でも、「私はこういうもので、こうして生きてきました」なんて、なかなか話せるもんじゃありません。それに対して紙芝居の場合は、「これが私の歩んできた人生です」って代弁してもらいやすいし、自己紹介にもなりやすいんです。

奥田は、互いの存在感を確かめ合うことや自己受容を促進する意味において、紙芝居の存在価値が高いと考えている。

やっぱり、人生全てを含みこんで認めてもらいたいです。皆さん、年相応に、例えば麻痺があるとか、目が見えにくいとか色々ネガティブなことはあります。でも、今の状態を受容されるよりは、人生を丸ごと受容してもらいたいわけです。あなたのここまでの何十年間が「素晴らしい」「本当に頑張りました」って認められたいんだと思います。

奥田（2017）は、「(前略)自分のこれまでの歩みを人生紙芝居とともに振り返ることで、若いときには人の何倍も働いて家族を養ったのだという誇りを取り戻したり、夫や子どもに恵まれて幸せだったと改めて感じたりして、自己肯定感がアップし、心の安定につながります。」と述べている。「さらに人生紙芝居とその制作プロセスは、主人公であるお年寄りや、その人を取り巻く他のお年寄りたち、介護している人（家族や施設職員）の心の奥に作用して、その人に対する見方を変えたり、関係性を改善したりという変化までもたらしてくれます。」としている。奥田自身は、自らが行うケア実践の中

で人生紙芝居の効果を体験的に実感しているが、実際に紙芝居を制作すると言っても、誰もが簡単に取り組めるものではない。

続いて、紙芝居づくりがどのように利用者同士、家族にも影響を与えるのか、人生紙芝居の制作方法についてまとめた。

5. 人生紙芝居の制作方法

人生紙芝居の制作方法について奥田（2017）は以下のように説明している。

9 段階の制作工程	①人生の聴き取り	②ストーリーを考える	③コマ割りを する	④下絵を 描く
⑤色塗り	⑥縁取り	⑦台紙に貼り 付ける	⑧台詞を 覚える	⑨演じ方の練習 を行う

奥田（2017）著書を参考に著者作成

①人生の聴き取り

人生紙芝居は利用者に対する綿密な聴き取りから始まる。聴き取りに要す時間について、奥田（2017）は、「まずは、お年寄りにこれまでたどってきた人生を語ってもらいます。ご本人が十分に語ることが出来ない場合は、配偶者や子どもなどに同席してもらいます。時間的には1時間はみておいた方がよいでしょう。2時間ぐらいかかる場合もあります。」(p.41)と述べている。また、奥田（2017）は、「聴き取りの場所は、できればご自宅が好ましいでしょう。なぜなら、玄関に孫の大きな靴がいくつも置いてあったり、飼い猫がいたり、すぐ近くを流れる川のせせらぎが聞こえてきたり、その人を取り囲んでいる普段の暮らしが見えてくる利点があるからです。」(p.41)としている。聴き取りは人生紙芝居の要の活動である。聴き取りの過程で利用者は過去の苦悩や成功体験を想起し、蓄積された心のとげが浄化（catharsis）され、援助者との信頼関係が醸成される。

②ストーリーを考える

人生紙芝居のストーリーに関して、奥田（2017）は、「本人が今でも『誇りに感じているもの』、『大切に思っているもの』を取り上げること。聴き手である自分が『感心したこと』、『感動したこと』を取り上げること。地元の子どもたちに『ぜひとも伝えておきたい』と思う事柄を取り上げる」(pp.44-46)ことがポイントであると述べている。通常、自分の身近で発生した出来事に価値を見出すことは難しい。聴き取ったエピソードを第三者の目線で再構成することにより「かくも生きてきた」という生の実感につなげていく。

③コマ割りを する

印刷紙芝居の多くは、8場面から16場面で構成されている作品が多い。奥田が手掛ける人生紙芝居の場合は、10枚程度の枚数でまとめられたものが多い。コマ割りをするという事は、紙芝居全体の

構成を考えるとということであり、この点について、奥田（2017）は、「(前略) 私の場合、デイサービスの場で上演することを前提に人生紙芝居を制作しているので、観る側には認知症の人もあります。あまり紙芝居の枚数が多いと、つまりストーリーが長くなると、最初の方の内容を忘れてしまうということもあって、ストーリーは分かりやすく簡潔にしておく必要があります。」(pp.53-54) と述べている。

④下絵を描く

コマ割りで検討した各場面を、描画していく。奥田（2017）は、「(前略) 絵を描くことがあまり得意でない人にとって、下絵を描く作業は、ストーリーづくりと並び、人生紙芝居作りの最大の難所と言えます。」(p.58) と述べている。この点について、筆者の聴き取りでは以下のように語った。

皆さん、よく絵が描けないとおっしゃいますが、絵が描けないなら本人の写真を貼るでもいいわけです。時には、線で体を表すマッチ棒的な表現でも全く問題ないです。要は、誰を主人公にしているかが分かるかどうかなんです。

人生紙芝居の目的は、誰が物語（人生）の主体であるかを明らかにすることにある。奥田（2017）は、「下絵を描く時のポイントとして、登場人物の顔を大きく描いて、表情をわかりやすくすること。あえて細かな背景は描かないこと。頭の高さから足の先まで描く必要はなし。絵に詰まったら、まずはインターネットでイラストを検索」(pp.59-61) することを推奨している。人生紙芝居は紙芝居の分類から区別すれば、手作り紙芝居に該当する。人生紙芝居は手作り紙芝居の長所が遺憾なく発揮され、作品の構図も物語の展開に合わせて自由自在に工夫されている。〈写真5 参照〉



〈写真5〉家族のつながりを縦に表現する奥田（2018）

⑤色塗り

色塗りでは、水彩絵の具を使用して下絵に色をつけていく。奥田（2017）は、「(前略) 色塗り作業は、人生紙芝居の主人公の人はもちろん、デイサービスのほかの利用者や介護職員も一緒に行なっていく。このとき、「人生かみしばいで、人生かみしめ合い」の作業にすることが何より大事です。」

(p.66) と述べている。参加可能なことを自分のペースで仲間と協働しながら行うことが重要であり、自らが参加することで、人生紙芝居の主人公の人生を追体験することが可能となる。

⑥縁取り

色塗り後に筆ペンを使い、絵をより見やすくする作業が縁取りである。この作業について奥田（2017）は、「(前略) 下絵を描く際に描いた線を筆ペンでなぞり、縁取りを行うことで、色と色との境目を一層強調します。」(p.69) と述べている。感動的な物語も、視覚的にインパクトが無ければ理解は半減してしまう。縁取り作業は、他者に物語の状況を伝える意味においても重要な工程である。

⑦台紙に貼り付ける

色塗りや縁取りが終わった紙芝居を補強する作業が台紙貼りである。奥田が制作する人生紙芝居

は、絵が描かれた画用紙にコートボール紙（厚紙）を貼り付け、画用紙のサイズに合わせてコートボール紙をカットし、補強を行っている。

⑧台詞を考える

奥田（2017）は、「(前略) 観客にとって、人生紙芝居が観ていて楽しいものになるかどうかは、語りに大きく左右されるので、ここは最後の難関というべき作業になります。」(p.71) と述べている。さらに、演じる際に注意すべきこと（ト書き）を紙芝居の裏面に書き込むことで、効果的な演技が可能となるとしている。

⑨演じ方の練習

奥田（2017）は、「本番前には必ず練習をしておくことが大切です。そうすることで、いざ本番のときに演者の心に余裕が生まれます。」(p.74) と述べている。以上、9つの工程を経て人生紙芝居は制作され、利用者がみんなの家を利用し始めてから初回の誕生日に関係者の前で披露される。

9つの工程に要す時間について、奥田（2017）は、「私の場合、本人・家族への聴き取りから始めて、一つの作品が完成するまでに、3～4週間かかります。」(p.103) と述べている。

6. 人生紙芝居の効果

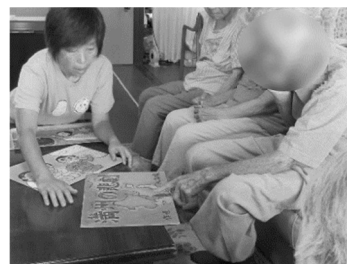
(1) 介護の質が変わる

奥田は自らが考案・導入した人生紙芝居によって宅老所内に様々な変化が発生したと考えている。

この活動を通じて、介護の仕事が楽しくなりました。紙芝居制作を通して、なんだか、疑似家族のような気持ちにもなるし、愛情も深まるように感じています。

被介護者に対しての愛情が介護職に不可欠かどうかについては、本稿の論点から逸脱するので、意見の表明は避ける。しかし、介護の仕事が楽しくなるという指摘は、介護者にとっても被介護者にも重要な意味を持つと考えられる。〈写真6参照〉

さらに奥田は、介護者と被介護者の良好な人間関係の構築以外にも利用者同士の関係性改善について次のように語っている。



〈写真6〉紙芝居を仲立ちにして

利用者に対話する奥田（2018）

この活動を通じてお互いを認め合う土壌ができるから、ここに新しい利用者さんが入ってきても、利用者さん同士の関係性がとてもいいんです。互いの認め合いがあることで雰囲気は良くなるし、そうならば、私たちも楽しいし、負担も少なくなるし、みんな本当に穏やかなんですよ。

現時点では人生紙芝居の導入によって、全ての介護現場の環境が劇的に変化するとは断言はできない。また、事例に関しても限定的であり、汎用性の証明には至っていない。しかし、利用者本人を主人公とする人生紙芝居が導入されたことで、介護職員による利用者理解は促進され、介護者と被介護者との関係性が良好に育まれることが確認できた。

(2) 人生紙芝居の有用性

ここまで、奥田真美が実践してきた人生紙芝居について、その成り立ちや制作方法について検討してきた。今日までにみんなの家で制作された紙芝居は80作を超え、現在も新たな利用者との出会いの度に紙芝居が制作されている。

通常、紙芝居は幼児や児童を対象とした視聴覚教材として考えられている。しかし、奥田が実践している人生紙芝居は、介護現場において新たなレクリエーションプログラムを提供するだけでなく、被介護者やその家族が自分らしさを発見し、自分が備えている能力やスキルを自覚することにつながっていく。さらに制作過程の中で援助者と被援助者の親密な信頼関係（rapport）の形成が促進され、それまで否定的にとらえてきた経験をプラスに転化させる可能性が認められた。

また、被介護者の生活史を丁寧に回想することにより、被介護者にとって、これから必要とされる社会的資源（resource）の発見につながることも考えられる。これらは、時として否定的に取られがちな被介護者の経験や記憶をリフレーミングさせ、ストレングスモデル⁹の実践にも役立つと考えられる。その意味において、介護現場における人生紙芝居は、単に身近な余暇活動の範疇にとどまることのない援助実践であることを示唆している。

7. おわりに

本稿は児童文化財として認識されている紙芝居の新たな活用方法として、介護現場で関心が高まっている介護系紙芝居の有用性について考察し、人生紙芝居の成り立ちや特徴について報告したものである。また、人生紙芝居を成立させた奥田の語りを基に紙芝居をケアサービスに活かす視点や制作方法についても検討した。人生紙芝居の具体的な効果については今後も継続的な検証が求められるが、本研究により、以下のことが確認された。

(1) 人生紙芝居が開始された場と考案者について

人生紙芝居は、静岡県賀茂郡西伊豆町で介護事業所（デイサービス）を運営している、NPO法人みんなの家（代表：奥田俊夫）で開始された紙芝居活動であり、考案者はケア主任の奥田真美である。奥田は介護紙芝居研究家の遠山昭雄との出会いを通じ、介護現場で紙芝居を取り入れた。当初は既存の印刷紙芝居を演じたが、利用者との信頼関係の構築を目指して、独自の人生紙芝居の制作を行うようになった。

(2) 人生紙芝居の制作方法

人生紙芝居の制作は9段階の工程がある。その中には、主人公となる利用者の聴き取りや利用者が主体的に参画する色塗りや縁取り作業も含まれている。紙芝居は演じることを目的とした文化財であるため、最終的には劇的に演じることも求められるが、人生紙芝居の場合、あくまで中心的な立場は利用者本人であり、利用者の生き方や存在そのものに焦点があてられなくてはならない。

(3) 人生紙芝居の効果

人生紙芝居は、児童文化財として認知されてきた紙芝居を特に高齢者に対する対人援助技術の一つとして昇華した一手法である。人生紙芝居の制作を通じて、利用者理解に欠かせない傾聴、利用者が中心的な存在として生きてきた時代背景の理解、生活体験を掘り下げることにより創られる物語づ

くり、下絵を描くことや色塗りなどを通して深まる利用者同士の相互理解、実演によってもたらされる自己受容の促進が人生紙芝居によってもたらされる効果である。

この実践の発展については他の活動を含めて今後も注視していく必要がある。また、介護領域における紙芝居活動の実効性については引き続き研究課題としたい。

(注)

1 遠山昭雄 介護紙芝居研究者 1950年埼玉県生まれ。重度身障者療護施設、精神科勤務、介護職員を経て、紙芝居実演家となる。

2 パーキンソン病 振戦（ふるえ）、動作緩慢、筋強剛（筋固縮）、姿勢保持障害（転びやすいこと）を主な運動症状とする病気

<https://www.nanbyou.or.jp/entry/169> 難病情報センター

3 紙芝居『へっこきよめ』 文：香山美子 画：川端 誠 出版社：教育画劇（1993）ISBN:9784876927142

4 紙芝居『しょいくらべ』 みんなの家著/奥田真美著 監修：遠山昭雄 出版社：雲母書房（2009）ISBN-10:4876722684

5 ストレングスモデル 要援護者の「できないこと」「問題点」に目を向けるのではなく、本人が持っている「できること」「強さ」に焦点を当てて支援することをいう。『イラストでみる社会福祉用語事典』編集：福祉教育カレッジ 発行：(株)医学評論社（2010）

引用・参考文献

- ・ 上地ちづ子（1997）『紙芝居の歴史』久山社 p.7
- ・ 子どもの文化研究所編（1972）『紙芝居 創造と教育性』童心社 p.20
- ・ 遠山昭雄 監修（2006）『はじめよう老人ケアに紙芝居』雲母書房 p.4, p.14
- ・ トリシャ・グリーンハル／ブライアン・ハーウィッツ編集（2001）『ナラティブ・ベイスト・メディスン 臨床における物語りと対話』金剛出版 序文
- ・ 野口裕二（2002）『物語としてのケア ナラティブ・アプローチの世界へ』医学書院 p.15
- ・ 小林幹児（2009）『回想療法の理論と実際』福村出版 p.19
- ・ 奥田真美（2017）『新しい回想レクリエーション「人生紙芝居」』講談社 p.2, p.11, p.40, p.103

SUMMARY

Trends in Kamishibai Culture II

The origins and practice of the Life History Kamishibai

The kamishibai, which has developed as a uniquely Japanese cultural asset, has been used mainly in the fields of childcare and education. However, in recent years, the value of kamishibai has also been reexamined in the area of nursing care, with a variety of practices being carried out. Among them, the NPO Minna no Ie's initiative of the life history kamishibai is highly unique.

This paper discusses the origins and actual state of life history kamishibai activities from the perspective of the NPO Minna no Ie, which provides care through kamishibai shows at nursing homes. It also discusses the career of Mami Okuda, who established the technique of the life history kamishibai in nursing care settings, as well as the perspectives required in the future for nursing care, based on Okuda's own narrative, and reports on the characteristics of life history kamishibai.

Keywords: Kamishibai, children's culture, dramatic expression, nursing and care, life history